「広島で感じた戦争の現実」

安田中学校　３年　　井　上　　爽

私は今回、広島平和記念式典への参加と、広島平和記念資料館の見学を通して、原爆について多くのことを学びました。

特に心に残ったのは、一発の原子爆弾によって、一瞬のうちに多くの人が亡くなったということです。原爆が投下されたことで、多くの人の命が奪われただけでなく、その後も長い間、被爆した人々が苦しんだことを知りました。

資料館では、原爆によって被害を受けた人々の生活や、当時の広島の様子を知ることができました。これまで私は、原爆について教科書などで学んでいましたが、実際の写真や資料を見ることで、戦争によって起きたことをよりリアルに感じました。特に、一瞬にして多くの人の命や、それまでの普通の生活が失われたことを考えると、とても大きな衝撃を受けました。

また、平和記念式典に参加して、広島で起こったことを忘れず、これからも伝えていくことが大切だと思いました。戦争や原爆について、普段の生活の中で深く考える機会は多くありません。しかし、今回実際に広島を訪れたことで、平和な毎日は当たり前ではないということを改めて感じました。

今回学んだことを自分だけで終わらせず、これからも原爆や戦争について知り、周りの人にも伝えていきたいです。そして、今ある平和な生活を当たり前だと思わず、大切にしていきたいと思います。

「広島で学んだ事」

安田中学校　３年　　帆　苅　　彩

私が広島で学んだことは、戦争や原爆の悲惨さを知ることの大切さと、それを次の世代へと語り継いでいく責任です。

今回、広島平和記念式典に阿賀野市の代表として参列し、特に印象に残ったことは、被爆された方から直接体験を聞いたことです。その方は、原爆が落とされた当時、中学２年生でした。現在は 90 歳近くになっているのにも関わらず、その時の記憶を今も鮮明に覚えていました。

私はその話を聞いて、「悲しい」という気持ちよりも、「辛い」「苦しい」という感情が強く湧いてきました。

私は、広島へ行く前から、戦争を題材にした映画などをよく見ていました。しかし、実際に広島を訪れて知ったのは、今まで自分が思っていた戦争の姿とは違うものでした。映画や物語では、どうしても美化されます。だからこそ、ある一つの話だけで「これが戦時中の日本だった」と思ってはいけないと感じました。

そして、今回私が改めて感じたことは、戦争を経験した方から体験談を聞ける時間には限りがあるということです。その言葉を今のうちにたくさん聞いておかなければいけないと思いました。

今回の経験を改めて振り返って、広島で見たもの、聞いたこと、感じたことを、この訪問だけで終わらせたくないと感じました。

大変な状況の中で必死に生き抜いた方々、戦争によって尊い命を失った方々がいたことを忘れず、私たち自身も、これから精一杯生きていく使命があると思います。そして、自分が学んだことを自分の中に残すだけでなく、次の世代へと語り継いでいくことが私たちにできることの一つだと思いました。

「実物を見て学んだこと」

安田中学校　３年　　鈴　木　結　月

私は広島派遣事業に行き、学校の授業の中で学んだことやアニメ、映画で見たことがすべて本当だと理解しました。そして、実物を見てリアルさと恐怖を以前よりも感じました。

まず原爆ドームと慰霊碑を見学しました。原爆ドームは鉄骨がむき出しになっている状態で、ドーム周辺にはレンガが落ちていました。当時の様子、凄まじい爆風で建物が一瞬にして破壊されたことを学ぶことができました。

次に資料館に行き、お弁当箱、洋服、三輪車などの展示を見ました。その中で私が一番恐怖を感じた展示はガラス瓶がドロドロに溶けて、互いにくっついているものです。この展示が表す意味は「８月６日に広島が 3,000 度から 4,000 度になった」ということです。それを知った瞬間、衝撃を受け、アニメで知った「人間の皮膚が垂れ下がった人がたくさんいる」ということも事実だと分かりました。

最後に被爆された河野キヨ美さんの体験を聞きました。突然落とされた原爆によって、当たり前だった日常が一瞬にして奪われてしまったということをよりリアルに感じました。そしてたくさんの命が奪われてしまったことも、今までよりもリアルに想像ができ、大きな恐怖を感じました。

今回の派遣事業で、原爆落下や戦争について、今まで以上に深く考えることができました。そして、戦争は絶対にしてはいけないことだと実感しました。戦争をしないためには、一人ひとりの意見の尊重、思いやりが大切だと思うので、日常生活で意識して生活したいと思います。

「平和のバトン」

京ヶ瀬中学校　３年　　江　花　凜　香

私は八月五日、六日、広島平和記念式典派遣事業に参加してきました。二日間の活動を通して、私は様々なことを感じ、そして考えました。特に心に残ったのは、次の二つのことです。

一つ目は、原爆の恐ろしさについてです。社会や道徳の授業で学んだとおり、原爆は広島の多くの人々の命や生活を一瞬にして奪ってしまいました。私はこれまで原爆については授業で初めて知ることが多く、実際どれほど恐ろしいものなのか、実感がもてずにいました。しかし、今回実際に広島を訪れ、原爆ドームを見学したり、被爆された方のお話を聞いたりすることで、原爆について単なる知識として理解するだけではなく、そこで起きたことを知り、人の思いに触れ、自分自身で戦争や平和について深く考えることが重要だと思いました。

二つ目は参加する中学生の多さです。全国各地からたくさんの中学生が集まっていて、これほどの多くの人が平和について考えていることにとても驚きました。また、平和記念公園には、たくさんの千羽鶴がありました。私たちも、阿賀野市のみんなで協力して作り上げた千羽鶴を奉納してきました。たくさんの人の平和への思いが集まっていることを感じ、私も今回その一人になれたことを嬉しく思いました。

今回の派遣事業を通して、平和な毎日は当たり前ではないことを改めて感じました。また、実際に見たり聞いたりしたことで普段の生活ではできない貴重な体験をさせてもらいました。この経験を忘れず、私たち中学生でもできることを考え、行動していきたいと思います。行動の第一歩は、まず平和について知り、考えることです。私たちにできることから始め、繋がれてきた平和への思いを私たちも次の世代へ繋いでいきたいと思います。

「私たちができること」

京ヶ瀬中学校　３年　　花　澤　遥　愛

私は今回広島に行き、広島に原爆が投下されたことについてたくさん学び、改めて平和について考えることができました。

広島に原子爆弾が投下されたのは、一九四五年の八月六日のことでした。一瞬にして原爆は多くの人の命を奪い、その後も原爆による影響に苦しんだ人がたくさんいたことを知りました。資料館に行き、写真や資料を見たときには、自分が思っていた以上に悲惨な出来事だったことを知り、思わず目を背けたくなりました。

私たちは今回、実際に被爆された方々のお話を聞く機会をいただきました。お話をしてくださった方々が、「もう戦争は絶対に起こしてはならない。」「あの日、見た光景は一生忘れられない。」という言葉を残されていたのがとても印象的でした。

私は今まで、戦争や原爆について授業で習っただけで分かった気になっていました。しかし、当時、広島で暮らしていた人たちにも私たちと同じように家族がいて、学校生活を送っていたのだと思うと、急変した日常やその人たちの思いまで本当にはわかっていなかったのだとあらためて感じました。

原爆について学ぶとは、過去を振り返るだけではないと思います。同じことを二度と繰り返さないために、未来に向けて、私たちが原爆や戦争の悲惨さを受け止め、平和の大切さを伝えていくことが大切です。

私たちが実際に被爆された方からお話をきける最後の世代だということを今回お聞きしました。私は広島で起きたことを忘れずに、これからも平和について真剣に考えていきたいと思います。そして、自分だけでなく、多くの人とその思いをもてるように、今回私が学んだことを自分の周りの人たちにも伝えていきたいと思います。

「広島で考えた平和」

京ヶ瀬中学校　３年　　阿　部　颯　生

広島平和記念式典の中学生派遣事業に参加し、私は平和についてあらためて深く考えることができました。参加する前は、原爆について授業で学んできたことしか知識はなく、どこか遠い昔の出来事のように感じていました。しかし、広島の歴史に触れ、被爆者の方のお話を聞き、原爆によって多くの人の大切な日常や未来が突然奪われたことを知って衝撃を受けました。そして、戦争や原爆の恐ろしさを今までより身近に感じるようになりました。

特に心に残ったのは、被爆者の方の体験です。当時、広島で暮らしていた人たちは、私たちと同じように家族や友達と過ごし、学校へ通っていました。それが一瞬にして失われたことを考えると、とても胸が苦しくなりました。また、辛い体験を私たちに伝えてくださったことにも大きな意味があると感じました。二度と同じ悲劇を繰り返してはいけないという強い思いが伝わってきました。

平和記念式典では、多くの人が平和を願い、犠牲になった方々を追悼していました。その姿を見て、平和は当たり前にあるものではなく、一人一人が守っていかなければならないものだと気づきました。戦争を経験していない私たちだからこそ、過去の出来事をしっかり学び、次の世代へ伝えていく責任があると思いました。

今回の広島派遣事業を通して、平和を守るためには、相手の気持ちを考え、違いを認め、身近な人と支え合うことが大切なのだとあらためて考えることができました。これからも広島で学んだことを忘れず、家族や友達にも伝えていきたいです。そして、戦争や原爆のない未来をつくるために、自分にできることを考え続けていきたいと思います。

「平和の想いを繋ぐ」

水原中学校　３年　　五十嵐　想　太

私は広島に行くまで知ったつもりになっていた。授業で話を聞いたり、スマートフォンで調べたりする中で、原爆がどれほど多くの命を奪い、今なお苦しむ人々がいることを学んできた。しかし、それは知識として知っているだけで、本当の意味で原爆の悲惨さを知るのは実際に行ってからだった。

派遣では原爆ドームを間近で見たり、原爆の子の像に折り鶴を捧げたりした。特に広島平和記念資料館は強く印象に残っている。ボロボロになった制服、年齢や性別が分からないくらい火傷を負った人の写真、真っ黒に焦げた弁当箱。当時、そこで多くの人々が生活し、そして被爆した。それが様々な展示から生々しく伝わってきた。

知識だけでは分からなかった衝撃だった。胸がズキンと痛み、頭がグラッとするほど、受け入れ難い悲惨な痕跡と、心の奥深くに響く強い衝撃を目の当たりし、実感した。

私は、派遣を通して知ったこと、感じたことを身内や仲間、そして次の世代にも伝えていきたい。私は派遣の中で被爆者の方の話を直接聞くことができたが、それができるのは私たちが最後の世代なのかもしれない。私ができることは、知ったことを忘れず、感じたことを風化させずに、次に繋げることだと思う。

「広島で学んだこと」

水原中学校　３年　　加　藤　愛　尊

このたび広島の派遣事業に参加し、１日目は原爆ドーム、原爆の子の像、広島平和記念資料館、袋町小学校平和資料館を訪れ、２日目は平和記念公園での式典に参加し、全国こども平和サミットにも出席しました。１日目で特に印象に残ったのは、原爆資料館の展示と被爆者の方の体験談です。人が火傷を負った写真はとても衝撃的で言葉を失いました。さらに実際に被爆された方の体験談を聞き、原爆がどれほど残酷で、多くの人々の人生を大きく変えてしまったのかを強く感じました。原爆の子の像では千羽鶴を奉納し、犠牲になった子どもたちのことを思いながら平和を思う気持ちが深まりました。

２日目の平和記念式典には、想像以上に多くの人々が参列しており、平和を願う思いの大きさを改めて実感しました。全国こども平和サミットにも出席し、他の参加者とともに平和について考える貴重な時間を過ごすことができました。戦争は本当に残酷なことです。今もこれからも絶対に起こしてはいけないと強く思いました。この経験を通して平和の大切さをより深く理解することができました。

これからは、今回学んだことや被爆者の方の思いを周りの人たちにも伝え、平和の大切さを広めていきたいと思います。このような貴重な機会をいただき、ありがとうございました。

「語り継ぐこと」

水原中学校　３年　　関　ま　ほ　ろ

私は今回の研修を通して心に残ったことがたくさんありました。特に心に残ったのは広島平和記念式典での「平和への誓い」で話していた「私たちには、被爆体験を直接聴くことができる最後の世代として、当時の記憶を事実として受け止める使命がある」という部分です。

１日目は原爆ドームや広島平和記念資料館を訪れ、原爆の悲惨さを目の当たりにしました。丸見えになった建物の骨組み、真っ黒になったお弁当箱や焼けてボロボロになった服など本当にこんなことがここで起こったこととは信じられませんでした。原子爆弾がどれほど恐ろしいもので、人々にどのような影響をもたらすのか考えれば考えるほど辛く、苦しい思いになりました。

２日目に全国こども平和サミットに参加し、被爆者の河野キヨ美さんのお話を聞きました。実際に被爆された方の話を聞き、一気に原爆が本当に起こったことなんだと実感が湧きました。キヨ美さんは最後にこうおっしゃっていました。「言葉の力を信じて人々の心を動かすよう平和について伝えてください。」私はその言葉を聞き、平和への誓いのことを思い出しました。残念ながら年々、被爆者の数は減少し、このように直接、原爆のことについて聞ける機会も少なくなっています。私たち一人一人が平和について学び、考え、これからの世代に語り継いでいく必要があると思います。このような悲劇を二度と起こさないために。戦争が過去の話ではなく、未来の話にならないよう。今回の研修で学んだことや感じたことを多くの人に伝えていきたいです。

そして、いつか核兵器も戦争もない平和な世界が訪れることを心から願っています。

「原爆の苦しみを知って」

笹神中学校　３年　　堀　　颯　介

私は、広島に訪れる前、原爆はとてつもない威力を持った爆弾というイメージしかもっていませんでした。しかし、実際に見て、聞いてそのイメージはもっと恐ろしいものへ変わりました。

私がこの訪問で最も心に響いたのは、河野キヨ美さんの講話です。河野さんは原爆投下後、二人の姉を探しに市内へ入るとさまざまなものを目撃したそうです。皮膚が激しく焼けただれ、人が人とは思えない姿をしていたこと、病院の花壇に積み上げられた治療が施せなかった私たちと同じ中学生の死体の山、無傷だった兵隊たちが放射線によって数日後に全員亡くなったこと、それらを目撃した際の辛く、苦しい記憶を思い出したくないながらもお話ししてくださいました。私はこのお話を聴き、自分だったら一生をかけても立ち直ることができないだろうと思いました。

それと同時になぜ罪のない人々がこんなにも苦しい思いをしなければならないのか、という疑問が浮かんできました。自分たちと同じく大きな夢を抱えて生きている人もいたと思います。現に私も夢をもっています。その夢をかなえるため、毎日毎日勉強やスポーツを頑張っています。しかし、被爆して亡くなった中学生は一瞬にして夢を叶えることも、その努力をすることもできなくなったのです。何気なく生きているこの日常は一瞬にして壊れてしまうかもしれない、儚いものなんだと感じました。

これらの広島での学びをもとに友達や周りの人に実際の原爆の恐ろしさを語り、平和の尊さを共に考えていきたいです。

「当たり前の大切さ」

笹神中学校　３年　　佐久間　愛　心

私はもともと戦争の歴史に興味があり、広島の原爆投下についても調べていたため、ある程度の内容は知っているつもりでした。しかし、実際に広島を訪れてみて、調べるだけでは分からない事実がたくさんあることに気づきました。

資料館では多くの資料を見ました。その中で特に心に残っているのは、黒焦げになったお弁当やボロボロになった服です。これらは、当時の人が普段の生活の中で使っていたものです。それを見て、亡くなった方々にも私たちと同じように、家族と過ごしたり学校へ行ったりする日々があったのだとわかりました。資料館に展示されているものは、原爆の恐ろしさを伝えるだけではなく、一人一人が当たり前に過ごしていた「日常」があったことの証拠でもあるのだと思いました。

被爆された方のお話でも「「存在」を知ってほしい」と仰っていて、過去の出来事として知ってほしいのではなく、一人一人の日常があり、ちゃんと生きていたことを知ってほしいのだと感じとりました。

被爆された方の中には、資料館の建物に否定的な方もいました。今、その方はボランティアとして被爆体験を語る立場にいます。それは、「二度と同じ思いをさせないためには自分が語り継いでいくしかない」と思ったからだそうです。語り継いでいくことは、風化させないだけでなく、同じ悲しみを繰り返さないためでもあると分かりました。

私は広島でたくさんの人の思いに触れ、今ある当たり前のありがたさを実感することができました。また、私たちは戦争について直接聞くことのできる最後の世代として、次の世代に語り継いでいくことが大切だと思います。「関係ない」で終わらせず、自分にできる事を考えることが平和につながると思います。

「広島派遣事業を経験して」

笹神中学校　３年　　宮　川　凜　香

私は広島に行く前、原爆について先生から階段に座っていた人が亡くなってしまいその部分が熱により影のようになった話や真っ黒になったお弁当の話を聞いたことがありました。しかし、話を聞いたときはとても驚きましたが、どれだけ恐ろしいものなのかを想像することはできませんでした。そこで、実際に広島に行ったことで、原爆がどれだけ多くの人々の命を奪ったのかをリアルに知ることができました。

平和記念資料館には、被爆した方々の絵や写真、被爆者の遺品などが多く展示されていました。それは、どれも現実で起こったものとは思えませんでした。

ある遺品の説明に「僕がこんな火傷をしているので、お母さんがかわいそうだと、かえって私を労わってくれた」と書かれていました。私は、それを見たとき泣いてしまいそうになりました。原爆の被害にあい、言葉にならないほどとても痛くて苦しいはずなのに、お母さんのことを気にかけているとても優しい男の子が亡くなってしまったのです。その子は当時１４歳だったそうです。私よりも一つ年下なのに、私はお母さんに同じ言葉をかけてあげられる自信がありません。

他にも私よりも小さい子や私と同じくらいの歳の子の遺品が多く展示されていました。

戦争で、昨日まで幸せに暮らしてきた、何の罪のない人たちの生活や命が一瞬で奪われてしまいました。今でも世界で戦争が起きています。これ以上、罪のない人たちの命を奪わないために、一人一人が戦争を他人事とは思わず、戦争はどうして起きるのか、平和はどうしたら実現するのか考えることが大切だと思います。そして、世界中の人々が安心して幸せに暮らせる世界を世界中の人々と作りたいです。